

私の個人主義

夏目漱石



一冊堂青空文庫

私の個人主義

夏目漱石

——大正三年十一月二十五日学習院輔仁会において述——

私は今日初めてこの学習院というものの中に這^{はい}入りました。もつとも以前から学習院は多分この見当だろうぐらいに考えていたには相違^{そうい}ありませんが、はつきりとは存じませんでした。中へ這入ったのは無論今日が初めてでございます。

さきほど岡田さんが紹介^{しょうかい}かたがたちよつとお話になった通りこ

の春何か講演をというご注文でありましたが、その当時は何か差^{さしつ}支^{かえ}があつて、——岡田さんの方が当人の私よりよくご記憶^{きおく}と見えてあなたがたにご納得のできるようにただいまご説明がありました。が、とにかくひとまずお断り^{いた}を致さなければならん事になりました。しかしただお断りを致すのもあまり失礼と存じまして、この次には参りますからという条件をつけ加えておきました。その時念のためこの次はいつごろになりますかと岡田さんに伺^{うかが}いましたら、此年^{ことし}の十月だというお返事であつたので、心のうちに春から十月までの日数を大体繰^くつてみて、それだけの時間があればそのうちにどうにかできるだろうと思つたものですから、よろしゆ

うございますとはつきりお受合うけあい申したのであります。ところが幸か不幸か病氣に罹かりまして、九月いっぱい床とこについておりますうちにお約束やくそくの十月が参りました。十月にはもう臥ふせってはおりませんでしたけれども、何しろひよろひよろするので講演はちよつとむずかしかったのです。しかしお約束を忘れてはならないのですから、腹の中では、今に何か云いって来られるだろう来られるだろうと思つて、内々ないないは怖こわがっていました。

そのうちひよろひよろもついに癒なおってしまったけれども、こちらからは十月末まで何のご沙汰さたもなく打ち過ぎました。私は無論病氣の事をご通知はしておきませんでした、一二三の新聞に

ちよつと出たという話ですから、あるいはその辺の事情を察せられて、誰^{だれ}かが私の代りに講演をやつて下さつたのだらうと推測して安心し出しました。ところへまた岡田さんがまた突然^{とつぜん}見えたのであります。岡田さんはわざわざ長靴を穿^はいて見えたのであります。（もつとも雨の降る日であつたからでもありましようが、）そう云つた身^み拵^{ごしら}えで、早稲田^{わせだ}の奥^{おく}まで来て下すつて、例の講演は十一月の末まで繰り延ばす事にしたから約束通りやつてもらいたいというご口上なのです。私はもう責任を逃^{のが}れたように考えていたものですから実は少々驚^{おど}ろきました。しかしまだ一カ月も余裕^{よゆう}があるから、その間にどうかなるだらうと思つて、よろしゅうご

ございますとまたご返事を致しました。

右の次第で、この春から十月に至るまで、十月末からまた十一月二十五日に至るまでの間に、何か纏まとったお話をすべき時間はいくらでも拵もてえられるのですが、どうも少し気分が悪くって、そんな事を考えるのが面倒めんどろでたまらなくなりました。そこでまあ十一月二十五日が来るまでは構かまうまいという横着りようけんな料簡おこを起して、ずるずるべったりとその日その日を送っていたのです。いよいよと時日せまが逼せまった二三日前になって、何か考えなければならぬといふ気が少ししたのですが、やはり考えるのが不愉快ふゆかいなので、とうとう絵を描かいて暮くらしてしまいました。絵を描くというと何かえ

らいものが描けるように聞^{きこ}えるかも知れませんが、実は他愛もな
いものを描いて、それを壁^{かべ}に貼^はりつけて一人で二日も三日もぼん
やり眺^{なが}めているだけなのです。昨日でしたかある人が来て、この
絵は大変面白い——いや面白いと云ったものではありません、面白
い気分の時に描いた画^えらしく見えると云ってくれたのでした。そ
れから私は愉快だから描いたのではない、不愉快だから描いたの
だと云って私の心の状態をその男に説明してやりました。世の中
には愉快でじっとしてられない結果を画にしたり、書にした
り、または文にしたりする人がある通り、不愉快だから、どうか
して好^{このころもち}い心持になりたいと思つて、筆を執^とつて画なり文章なりを

作る人もあります。そうして不思議にもこの二つの心的状態が結果に現われたところを見るとよく一致いっちしている場合が起るのです。しかしこれはほんのついでに申し上あげる事で、話の筋に関係した問題でもありませんから深くは立ち入りません。——何しろ私はその変な画を眺めるだけで、講演の内容をちつとも組み立てずに暮らしてしまったのです。

そのうちいよいよ二十五日が来たので、否いやでも応でもここへ顔を出さなければすまない事になりました。それで今朝けさ少かんがえ考を纏まとめてみましたが、準備がどうも不足のようです。とてもご満足に行くようなお話はできかねますから、そのつもりでご辛防しんぼうを願

ます。

この会はいつごろから始まって今日まで続いているのか存じませんが、そのつどあなたがたがよその人を連れて来て、講演をさせるのは、一般の慣例として毫ごうも不都合でないと私も認めているのですが、また一方から見ると、それほどあなた方の希望するような面白い講演は、いくらどこからどんな人を引張ひっぱって来ても容易に聞かれるものではなかつとも思うのです。あなたがたにはただよその人が珍めづらしく見えるのではありますまいか。

私が落語家から聞いた話の中にこんな諷刺ふうしてき的のがあります。――昔むかしあるお大名が二人目黒辺へ鷹狩たかがりに行つて、所々方々を馳かけ

廻^{まわ}った末、大變空腹になつたが、あいにく弁当の用意もなし、家
来とも離^{はな}れ離^{はな}れになつて口腹を充^みたす糧^{かて}を受ける事ができず、仕
方なしに二人はそこにある汚^{きた}ない百姓家^{ひやくしやうや}へ馳^はけ込んで、何でも好
いから食わせろと云つたそうです。するとその農家の爺^{じい}さんと婆^{ばあ}
さんが氣の毒がつて、ありあわせの秋刀魚^{さんま}を炙^{あぶ}つて二人の大名に
麦飯を勧めたと云います。二人はその秋刀魚^{さんま}を肴^{さかな}に非常に旨^{うま}く飯
を済まして、そこを立出^{たちいで}たが、翌日になつても昨日の秋刀魚^{さんま}の香^{かおり}
がぶんぶん鼻を衝^つくといつた始末で、どうしてもその味を忘れる
事ができないのです。それで二人のうちの一人が他を招待して、
秋刀魚のご馳走^{ちそう}をする事になりました。その旨^{むね}を承^{うけたま}わつて驚ろい

たのは家来です。しかし主命ですから反抗はんこうする訳にも行きませんので、料理人に命じて秋刀魚の細い骨を毛抜けぬきで一本一本抜ぬかして、それを味淋みりんが何かに漬けたのを、ほどよく焼いて、主人と客とに勧めました。ところが食う方は腹も減っていず、また馬鹿ばか丁てい寧いな料理方で秋刀魚の味を失った妙みょうな肴しを箸はしで突つついてみたところ、ちつとも旨くないのです。そこで二人が顔を見合せて、どうも秋刀魚は目黒に限るねといったような変な言葉を発したと云うのが話の落おちになっているのですが、私から見ると、この学習院という立派な学校で、立派な先生に始終接している諸君が、わざわざ私のようなものの講演を、春から秋の末まで待ってもお聞

きになろうというのは、ちょうど大牢の美味に飽いた結果、目黒の秋刀魚がちょっと味わってみたくなったのではないかと思われるのです。

この席におられる大森教授は私と同年かまたは前後して大学を出られた方ですが、その大森さんが、かつて私にどうも近頃の生徒は自分の講義をよく聴かないで困る、どうも真面目が足りないで不都合だというような事を云われた事があります。その評はこの学校の生徒についてではなく、どこかの私立学校の生徒についてだったろうと記憶していますが、何しろ私はその時大森さんに対して失礼な事を云いました。

ここで繰り返していうのもお恥^はずかしい訳ですが、私はその時、君などの講義をありがたがって聴く生徒がどの国にいるものかと申したのです。もっとも私の主意はその時の大森君には通じていなかったかも知れませんが、この機会を利用して、誤解を防いでおきますが、私どもの書生時代、あなたがたと同年輩^{どうねんばい}、もしくはもう少し大きくなった時代、には、今のあなたがたよりよほど横着で、先生の講義などはほとんど聴いた事がないと云つても好いくらいのものでした。もちろんこれは私や私の周囲のものを本位として述べるのでありますから、圏外^{けんがい}にいたものには通用しないかも知れませんが、どうも今の私からふり返って

みると、そんな気がどこかでするように思われるのです。現にこの私は上部うわべだけは温順らしく見えながら、けっして講義などに耳を傾かたむける性質ではありませんでした。始終怠なまけてのらくらしていました。その記憶をもつて、真面目な今の生徒を見ると、どうしても大森君のように、彼らを攻撃こうげきする勇気が出て来ないのです。そう云った意味からして、つい大森さんに対してすまない乱暴を申したのであります。今日は大森君に詫あやまるためにわざわざ出かけた次第ではありませんけれども、ついだからみんなのいる前で、謝罪しておくのです。

話がついとんだところへ外それてしまいましたから、再び元へ引

き返して筋の立つように云いますと、つまりこうなるのです。

あなたがたは立派な学校に入って、立派な先生から始終指導を受けていらっしやる、またその方々の専門的もしくは一般的の講義を毎日聞いていらっしやる。それなのに私みたようなものを、ことさらによそから連れて来て、講演を聴こうとなされるのは、ちようと先刻お話したお大名が目黒の秋刀魚を賞翫しょうがんしたようなもので、つまりは珍らしいから、一口食ってみようという料簡じゃないかと推察されるのです。實際をいうと、私のようなものよりも、あなたがたが毎日顔を見ていらっしやる常雇じょうやといの先生のお話の方がよほど有益でもあり、かつまた面白かろうとも思われるの

です。たとい私にしたところで、もしこの学校の教授にでもなっていたならば、単に新らしい刺戟しげきのないというだけでも、このくらしいの人数が集って私の講演をお聴きになる熱心なり好奇心こうきしんなりは起るまいと考えるのですがどんなものでしょう。

私がなぜそんな仮定をするかというと、この私は現に昔しこの学習院の教師になろうとした事があるのです。もっとも自分で運動した訳でもないのですが、この学校にいた知人が私を推薦すいせんしてくれたのです。その時分の私は卒業する間際まで何をして衣食の道を講じていいか知らなかったほどの迂濶者うかつものでしたが、さていよいよ世間へ出てみると、懷手ふとんどをして待っていたって、下宿料が

入って来る訳でもないので、教育者になれるかなれないかの問題はとにかく、どこかへ潜り込む必要があつたので、ついこの知人のいう通りこの学校へ向けて運動を開始した次第であります。その時分私の敵が一人ありました。しかし私の知人は私に向ってしきりに大丈夫らしい事をいうので、私の方でも、もう任命されたような気分になつて、先生はどんな着物を着なければならぬのかなどと訊いてみたものです。するとその男はモーニングでなくては教場へ出られないと云いますから、私はまだ事のきまらない先に、モーニングを誂らえてしまったのです。そのくせ学習院とはどこにある学校かよく知らなかったのだから、すこぶる変なも

のです。さていよいよモーニングが出来上できあがつてみると、あに計ら
んやせつかく頼たのみにしていた学習院の方は落第と事がきまっただの
です。そうしてもう一人の男が英語教師の空位を充たす事になり
ました。その人は何という名でしたか今は忘れてしまいました。
別段悔くやしくも何ともなかったからでしょう。何でも米国帰りの人
とか聞いていました。——それで、もしその時にその米国帰りの
人が採用されずに、この私がまぐれ当りに学習院の教師になっ
て、しかも今日まで永続していたなら、こうした鄭重ていちょうなお招きを
受けて、高い所からあなたがたにお話をする機会もついに来な
かったかも知れますまい。それをこの春から十一月までも待って

聴いて下さろうというのは、とりも直さず、私が学習院の教師に落第して、あなたがたから目黒の秋刀魚のように珍らしがられて
いる証拠しやうこではありませんか。

私はこれから学習院を落第してから以後の私について少々申上もうしあげようと思います。これは今までお話をして来た順序だからという意味よりも、今日の講演に必要な部分だからと思って聴いていただきたいのです。

私は学習院は落第したが、モーニングだけは着ていました。それよりほかに着るべき洋服は持っていなかったのだから仕方がありません。そのモーニングを着てどこへ行っただけだと思いますか？

その時分は今と違ちがって就職の途みちは大変楽でした。どちらを向いても相当の口は開いていたように思われるのです。つまりは人が払ふ底ていなためだったのでしょう。私のようなものでも高等学校と、高等師範しはんからほとんど同時に口がかかりました。私は高等学校へ周旋せんしてくれた先輩に半分承諾しやうだくを与えながら、高等師範の方へも好い加減な挨拶あいさつをしてしまったので、事が変な具合にもつれてしまいました。もともと私が若いから手ぬかりやら、不行届ふゆきとどきがちで、とうとう自分に祟たたって来たと思えば仕方ありませんが、弱らせられた事は事実です。私は私の先輩なる高等学校の古参の教授の所へ呼びつけられて、こっちへ来るような事を云いながら、他ほかに

も相談をされては、仲に立った私が困ると云って譴責けんせきされまし
た。私は年の若い上に、馬鹿の肝癰かんしゃくもち持ですから、いっそ双方そうほうとも
断ってしまったら好いだろうと考えて、その手続きをやり始めた
のです。するとある日当時の高等学校長、今ではたしか京都の理
科大学長をしている久原さんから、ちよつと学校まで来てくれと
いう通知があつたので、さつそく出かけてみると、その座に高等
師範の校長嘉納かのうじごろう治五郎さんと、それに私を周旋しゆせんしてくれた例の先
輩せんぱいがいて、相談はきまつた、こつちに遠慮えんりよは要いらないから高等師
範の方へ行ったら好かろうという忠告です。私は行いきがかり上い否いやだ
とは云えませんが承諾の旨を答えました。が腹の中では厄介やっかいな

事になってしまったと思わざるを得なかったのです。というものは今考えるともったいない話ですが、私は高等師範などをそれほどありがたく思っていなかったのです。嘉納さんに始めて会った時も、そうあなたのように教育者として学生の模範もはんになれというような注文だと、私にはとても勤まりかねるからと逡巡しゆんじゆんしたくらいでした。嘉納さんは上手な人ですから、否そう正直に断わられると、私はますますあなたに来ていただきたくなつたと云つて、私を離さなかったのです。こういう訳で、未熟な私は双方の学校を懸持かけもちしようなどという慾張根性よくばりこんじやうは更さらになかったにかかわらず、関係者に要らざる手数料をかけた後、とうとう高等師範の方へ行く

事になりました。

しかし教育者として偉えらくなり得るような資格は私に最初から欠けていたのですから、私はどうも窮屈きゆうくつで恐れ入おそりました。嘉納さんもあなたはあまり正直過ぎて困ると云ったくらいですから、あるいはもっと横着をきめていてもよかったのかも知れません。しかしどうあっても私には不向ふむきな所だとは思われませんでした。奥底のない打ち明けたお話をすると、当時の私はまあ肴屋が菓子かし家やへ手伝いに行ったようなものでした。

一年の後私はとうとう田舎いなかの中学へ赴任ふにんしました。それは伊予いよの松山にある中学校です。あなたがたは松山の中学と聞いてお笑

いになるが、おおかた私の書いた「坊ちゃん」でもご覧になった
のでしょう。「坊ちゃん」の中に赤シャツという渾名あだなをもっている
人があるが、あれはいったい誰の事だと私はその時分よく訊か
れたものです。誰の事だって、当時その中学に文学士と云ったら
私一人なのですから、もし「坊ちゃん」の中の人物を一々実在の
ものと認めるならば、赤シャツはすなわちこういう私の事になら
なければならぬので、——はなはだありがたい仕合せと申上げた
いような訳になります。

松山にもたった一カ年しかおりませんでした。立つ時に知事が
留めてくれましたが、もう先方と内約ができていたので、とうと

う断ってそこを立ちました。そうして今度は熊本くまもとの高等学校に腰こしを据すえました。こういう順序で中学から高等学校、高等学校から大学と順々に私は教えて来た経験をもっていますが、ただ小学校と女学校だけはまだ足を入れた試ためしがございません。

熊本には大分長くおりました。突然文部省から英国へ留学をしてはどうかという内談のあったのは、熊本へ行ってから何年目になりましたでしょうか。私はその時留学を断ことわろうかと思いました。それは私のようなものが、何の目的ももたずに、外国へ行ったからと云って、別に国家のために役に立つ訳もなからうと考えたからです。しかるに文部省の内意を取次とりついでくれた教頭が、それは先

方の見込みなのだから、君の方で自分を評価する必要はない、ともかくも行った方が好かろうと云うので、私も絶対に反抗する理由もないから、命令通り英国へ行きました。しかし果^{はた}せるかな何もする事がないのです。

それを説明するためには、それまでの私というものを一応お話ししなければならん事になります。そのお話がすなわち今日の講演の一部分を構成する訳なのですからそのつもりでお聞きを願います。

私は大学で英文学という専門をやりました。その英文学というものとはどんなものかとお尋^{たず}ねになるかも知れませんが、それを三

年専攻した私にも何が何だかまあ夢中むちゅうだったのです。その頃はジクソンという人が教師でした。私はその先生の前で詩を読ませられたり文章を読ませられたり、作文を作って、冠詞かんしが落ちていると云って叱しかられたり、発音が間違っていると怒おこられたりしました。試験にはウォーズワースは何年に生れて何年に死んだとか、シェクスピアのフォリオは幾通りあるとか、あるいはスコットの書いた作物を年代順に並ならべてみるとかいう問題ばかり出たのです。年の若いあなた方にもほぼ想像ができるでしょう、はたしてこれが英文学かどうかという事が。英文学はしばらく措おいて第一文学とはどういうものだが、これではとうてい解わかるはず

がありません。それなら自力でそれを窮め得るかと言うと、まあ
盲目めくらの垣覗かきのぞきといったようなもので、図書館に入って、どこをど
ううついても手掛てがかりがないのです。これは自力の足りないばかり
でなくその道に関した書物も乏とほしかったのだろうと思います。と
にかく三年勉強して、ついに文学は解らずじまいだったのです。
私の煩悶はんもんは第一ここに根ざしていたと申し上げても差支ないで
しょう。

私はそんなあやふやな態度で世の中へ出てとうとう教師になっ
たというより教師にされてしまったのです。幸に語学あやの方は怪し
いにせよ、どうかこうかお茶を濁にごして行かれるから、その日その

日はまあ無事に済んでいましたが、腹の中は常に空虚くうきよでした。空虚ならいつそ思い切りがよかったかも知れませんが、何だか不愉快な煮え切らない漠然はくぜんたるものが、至る所に潜ひそんでいるようで堪たまらないのです。しかも一方では自分の職業としている教師というものに少しの興味ももち得ないのです。教育者であるという素因の私に欠乏している事は始めから知っていましたが、ただ教場で英語を教える事がすでに面倒なのだから仕方ありません。私は始終中腰で隙すきがあつたら、自分の本領へ飛び移ろう飛び移ろうとのみ思っていたのですが、さてその本領というのがあるようで、無いようで、どこを向いても、思い切ってやっと飛び移れな

いのです。

私はこの世に生れた以上何かしなければならん、といって何を
して好いか少しも見当がつかない。私はちょうど霧きりの中に閉じ込
められた孤独こどくの人間のように立ち竦すくんでしまったのです。そうし
てどこからか一筋の日光が射さして来ないかしらんという希望より
も、こちらから探照灯を用いてたった一条ひとすじで好いから先まで明ら
かに見たいという気がしました。ところが不幸にしてどちらの方
角を眺めてもぼんやりしているのです。ぼうつとしているので
す。あたかも囊ふくろの中に詰められて出る事のできない人のような気
持がするのです。私は私の手にただ一本の錐きりさえあればどこか一

力所突き破って見せるのだがと、焦燥^{あせ}り抜^ぬいたのですが、あいにくその錐は人から与えられる事もなく、また自分で発見する訳にも行かず、ただ腹の底ではこの先自分はどうなるだろうと思つて、人知れず陰鬱^{いんうつ}な日を送つたのであります。

私はこうした不安を抱^{いだ}いて大学を卒業し、同じ不安を連れて松山から熊本へ引越^{ひっこ}し、また同様の不安を胸の底に畳^{たた}んでついに外国まで渡^{わた}つたのであります。しかしいったん外国へ留学する以上は多少の責任を新たに自覚させられるにはきまっています。それで私はできるだけ骨を折って何かしようとして努力しました。しかしどんな本を読んでも依然^{いぜん}として自分は囊の中から出る訳に参りま

せん。この囊を突き破る錐は倫敦ロンドン中探して歩いても見つかりそうになかったのです。私は下宿の一間の中で考えました。つまらないと思いました。いくら書物を読んでも腹の足たしにはならないのだと諦あきらめました。同時に何のために書物を読むのか自分でもその意味が解らなくなつて来ました。

この時私は始めて文学とはどんなものであるか、その概念がいねんを根本的に自力で作り上げるよりほかに、私を救う途はないのだと悟さとつたのです。今までは全く他人本位で、根のない萍うきぐさのように、そこいらをでたらめに漂ただよっていたから、駄目だめであつたという事によろやく気がついたのです。私のここに他人本位というのは、

自分の酒を人に飲んでもらって、後からその品評を聴いて、それを理が非でもそうだとしてしまういわゆる人真似ひとまねを指すのです。一口にこう云ってしまえば、馬鹿らしく聞こえるから、誰もそんな人真似をする訳がないと不審ふしんがられるかも知れませんが、事實はけっしてそうではないのです。近頃流行はやるベルグソンでもオイケンでもみんな向うむこの人がとやかきうので日本人もその尻馬しりうまに乗って騒ぐさわのです。ましてその頃は西洋人のいう事だと云えば何でもかでも盲従もつじゆうして威張いばったものです。だからむやみに片仮名を並べて人に吹聴ふいちやうして得意がった男が比々みなこれ皆是なりと云いたいくらいごろごろしていました。他のひと悪口ではありません。こういう私

が現にそれだったのです。たとえばある西洋人が甲こうという同じ西洋人の作物を評したのを読んだとすると、その評の当否はまるで考えずに、自分の腑ふに落ちようが落ちまいが、むやみにその評を触ふれ散らかすのです。つまり鵜吞うのみと云ってもよし、また機械的の知識と云ってもよし、とうていわが所有とも血とも肉とも云われない、よそよそしいものを我物顔わがものがおにしゃべって歩くのです。しかるに時代が時代だから、またみんながそれを賞ほめるのです。

けれどもいくら人に賞められたって、元々人の借着くじやくをして威張っているのだから、内心は不安です。手もなく孔雀の羽根を身に着けて威張っているようなものですから。それでもう少し浮華ふか

を去つて摯^{しじつ}実につかなければ、自分の腹の中はいつまで経^たつたつて安心はできないという事に気がつき出したのです。

たとえば西洋人がこれは立派な詩だとか、口調が大変好いとか云つても、それはその西洋人の見るところで、私の参考にならん事はないにしても、私にそう思えなければ、とうてい受^{うけうり}売をすべきはずのものではないのです。私が独立した一個の日本人であつて、けっして英国人の奴婢^{どひ}でない以上はこれくらいの見識は国民の一員として具^{そな}えていなければならない上に、世界に共通な正直という徳義を重んずる点から見ても、私は私の意見を曲げてはならないのです。

しかし私は英文学を専攻する。その本場の批評家のいうところ
と私の考かんがえと矛盾むじゆんしてはどうも普通ふつうの場合気が引ける事になる。そ
こでこうした矛盾がはたしてどこから出るかという事を考えなけ
ればならなくなる。風俗、人情、習慣、溯さかのぼっては国民の性格皆こ
の矛盾の原因になっているに相違ない。それを、普通の学者は単
に文学と科学とを混同して、甲の国民に氣に入るものはきつと乙おつ
の国民の賞讃を得るにきまっている、そうした必然性ふくが含まれて
いると誤認してかかる。そこが間違っていると云わなければなら
ない。たといこの矛盾を融和ゆうわする事が不可能にしても、それを説
明する事はできるはずだ。そうして単にその説明だけでも日本の

文壇ぶんだんには一道の光明を投げ与あたえる事ができる。——こう私はその時始めて悟ったのでした。はなはだ遅おそまきの話で慚愧ざんきの至いたりでありますけれども、事実だから偽いつわらないところを申し上げるのです。

私はそれから文芸に対する自己の立脚地りつきやくちを堅かためるため、堅めるというより新らしく建設するために、文芸とは全く縁えんのない書物を読み始めました。一口でいうと、自己本位という四字をようやく考えて、その自己本位を立証するために、科学的な研究やら哲てつ学的がくてきの思索しさくに耽ふけり出したのであります。今は時勢が違いますから、この辺の事は多少頭のある人にはよく解せられているはずですが、その頃は私が幼稚ようちな上に、世間がまだそれほど進んでい

かったので、私のやり方は実際やむをえなかったのです。

私はこの自己本位という言葉を自分の手に握^{にぎ}ってから大変強くなりしました。彼^{かれ}ら何者ぞやと気^き慨^{がい}が出ました。今まで茫^{ぼう}然^{ぜん}と自失していた私に、ここに立って、この道からこう行かなければならないと指^{さし}図^ずをしてくれたものは実にこの自我本位の四字なのであります。

自白すれば私はその四字から新たに出立したのであります。そうして今のようにただ人の尻馬にばかり乗って空騒ぎをしているようでははなはだ心元ない事だから、そう西洋人ぶらないでも好いという動かすべからざる理由を立派に彼らの前に投げ出してみ

たら、自分もさぞ愉快だろう、人もさぞ喜ぶだろうと思って、著書その他の手段によって、それを成就するのを私の生涯しょうがいの事業としようと考えたのです。

その時私の不安は全く消えました。私は軽快な心をもって陰鬱いんうつな倫敦を眺めたのです。比喻ひゆで申すと、私は多年の間懊惱おっのうした結果ようやく自分の鶴嘴つるはしをがちりと鉋脈ほに掘り当てたような気がしたのです。なお繰り返くしていうと、今まで霧の中に閉じ込まれたものが、ある角度の方向で、明らかに自分の進んで行くべき道を教えられた事になるのです。

かく私が啓発けいはつされた時は、もう留学してから、一年以上経過し

ていたのです。それでとても外国では私の事業を仕上る訳に行かない、とにかくできるだけ材料を纏めて、本国へ立ち帰った後、立派に始末をつけようという気になりました。すなわち外国へ行った時よりも帰って来た時の方が、偶然ながらある力を得た事になるのです。

ところが帰るや否や私は衣食のために奔走する義務がさつそく起りました。私は高等学校へも出ました。大学へも出ました。後では金が足りないので、私立学校も一軒稼ぎました。その上私は神経衰弱に罹りました。最後に下らない創作などを雑誌に載せなければならぬ仕儀に陥りました。いろいろの事情で、私は私の

企てた事業を半途で中止してしまいました。私の著わした文学論はその記念というよりもむしろ失敗の亡骸です。しかも畸形児の亡骸です。あるいは立派に建設されないうちに地震で倒された未成市街の廃墟のようなものです。

しかしながら自己本位というその時得た私の考は依然としてつづいています。否年を経るに従ってだんだん強くなります。著作的事業としては、失敗に終わりましたが、その時確かに握った自己が主で、他は賓であるという信念は、今日の私に非常の自信と安心を与えてくれました。私はその引続きとして、今日なお生きていられるような心持がします。実はこうした高い壇の上に

立って、諸君を相手に講演をするのもやはりその力のお蔭かげかも知れません。

以上はただ私の経験だけをざっとお話ししたのでありますけれども、そのお話を致した意味は全くあなたがたのご参考になりはしまいかという老婆心ろうばしんからなのであります。あなたがたはこれからみんな学校を去って、世の中へお出かけになる。それにはまだ大分時間のかかる方もございましょうし、またはおっつけ実社会に活動なさる方もあるでしょうが、いずれも私の一度経過した煩悶はんもん（たとい種類は違っても）を繰返くりかえしがちなものじゃなかろうかと推察されるのです。私のようにどこか突き抜けたくつても突

き抜ける訳にも行かず、何か掴つかみたくつても薬缶頭やかんあたまを掴むように
つるつるして焦燥じれったくなったりする人が多分あるだろうと思
うのです。もしあなたがたのうちですでに自力で切り開いた道を
持っている方は例外であり、また他ひとの後に従って、それで満足し
て、在来ざらいの古い道を進んで行く人も悪いとはけっして申しません
が、（自己に安心と自信がしっかり附随ふずいしているならば、）しか
しもしそうでないとしたならば、どうしても、一つ自分の鶴嘴くわで
掘り当てるところまで進んで行かなくなつてはいけなideしう。
いけないというのは、もし掘りあてる事ができなかつたなら、そ
の人は生涯不愉快で、始終中腰になつて世の中にまごまごしてい

なければならぬからです。私のこの点を力説するのは全くそのためで、何も私を模範もはんになさいという意味ではけっしてないので。私のようなつまらないものでも、自分で自分が道をつけつつ進み得たという自覚があれば、あなた方から見てその道がいかにか下らないにせよ、それはあなたがたの批評と観察で、私には寸毫すんごうの損害がないのです。私自身はそれで満足するつもりでありま

す。しかし私自身がそれがため、自信と安心をもっているからといって、同じ徑路けいろがあなたがたの模範になるとはけっして思っていないのですから、誤解してはいけません。

それはとにかく、私の経験したような煩悶があなたがたの場合

にもしばしば起るに違いないと私は鑑定かんていしているのですが、どうでしょう。もしそうだとすると、何かに打ち当るまで行くという事は、学問をする人、教育を受ける人が、生涯の仕事としても、あるいは十年二十年の仕事としても、必要じゃないでしょうか。ああここにおれの進むべき道があった！　ようやく掘り当てた！　こういう感投詞を心の底から叫さけび出される時、あなたがたは始めて心を安んずる事ができるのでしよう。容易に打ち壊こわされない自信が、その叫び声とともにむくむく首を擡もたげて来るのではありませんか。すでにその域に達している方も多数のうちにはあるかも知れませんが、もし途中で霧か靄もやのために懊惱もやもやしていら

る方があるならば、どんな犠牲ぎせいを払はらつても、ああここだという掘ほり当あてるところまで行ったらよろしかろうと思うのです。必ずしも国家のためばかりだからというわけではありません。またあなた方のご家族のために申し上げる次第でもありません。あなたがた自身の幸福のために、それが絶対に必要じゃないかと思うから申上げるのです。もし私の通ったような道を通り過ぎた後なら致し方もないが、もしどこかにこたわりがあるなら、それを踏潰ふみつぶすまで進まなければ駄目ですよ。——もっとも進んだってどう進んで好いか解らないのだから、何かにぶつかる所まで行くよりほかに仕方がないのです。私は忠告がましい事をあなたがたに強いる気は

まるでありませんが、それが将来あなたがたの幸福の一つになる
かも知れないと思うと黙^{だま}っていらなくなるのです。腹の中の煮
え切らない、徹底^{てっぺい}しない、ああでもありこうでもあるというよう
な海鼠^{なまこ}のような精神を抱^{いだ}いてぼんやりしては、自分が不愉快
ではないか知らんと思うからいのです。不愉快でないとおっ
しゃればそれまでです、またそんな不愉快は通り越^こしていると
おっしゃれば、それも結構であります。願^{ねが}くは通り越してありた
いと私は祈^{いの}るのであります。しかしこの私は学校を出て三十以上
まで通り越せなかったのです。その苦痛は無論鈍痛^{どんつう}ではありません
たが、年々歳々感^{さいさい}ずる痛^{いた}みには相違^{ちがい}なかったのであります。だから

もし私のような病気に罹った人が、もしこの中にあるならば、どうぞ勇猛^{ゆうもつ}にお進みにならん事を希望してやまないのです。もしそこまで行ければ、ここにおれの尻を落ちつける場所があつたのだという事実をご発見になつて、生涯の安心と自信を握る事ができるようになると思うから申し上げるのです。

今まで申し上げた事はこの講演の第一篇^{ぺん}に相当するものです。が、私はこれからその第二篇に移ろうかと考えます。学習院という学校は社会的地位の好い人が這入る学校のように世間から見倣^{みな}されております。そうしてそれがおそらく事実なのでしょう。もし私の推察通り大した貧民はここへ来ないで、むしろ上流社会の

子弟ばかりが集まっているとすれば、向後あなたがたに附随してくるもののうちで第一番に挙げなければならぬのは権力であります。換言^{かんげん}すると、あなた方が世間へ出れば、貧民が世の中に立った時よりも余計権力が使えるという事なのです。前申した、仕事をして何かに掘りあてるまで進んで行くという事は、つまりあなた方の幸福のため安心のためには相違ありませんが、なぜそれが幸福と安心とをもたらすかという、あなた方のもって生れた個性がそこにぶつかって始めて腰がすわるからでしょう。そうしてそこに尻を落ちつけてだんだん前の方へ進んで行くとその個性がますます発展して行くからでしょう。ああここにおれの安住

の地位があつたと、あなた方の仕事とあなたがたの個性が、しつくり合つた時に、始めて云い得るのでしょうか。

これと同じような意味で、今申し上げた権力というものを吟味ぎんみしてみると、権力とは先刻さつきお話した自分の個性を他人の頭の上に無理矢理に圧おしつける道具なのです。道具だと断然云い切つてわるければ、そんな道具に使い得る利器なのです。

権力に次ぐものは金力です。これもあなたがたは貧民よりも余計に所有しておられるに相違ない。この金力を同じくそうした意味から眺めると、これは個性を拡張するために、他人の上に誘惑ゆうわくの道具として使用し得る至極重宝なものになるのです。

してみると権力と金力とは自分の個性を貧乏人びんぼうにんより余計に、他人の上に押し被かぶせるとか、または他人をその方面に誘おびき寄せるとかいう点において、大變便宜べんぎな道具だと云わなければなりません。こういう力があるから、偉いようできて、その実非常に危険なのです。先刻申した個性はおもに学問とか文芸とか趣味しゅみとかについて自己の落ちつくべき所まで行って始めて発展するようにお話し致したのですが、実をいうとその応用ははなはだ広いもので、単に学芸だけにはとどまらないのです。私の知っている兄弟で、弟の方は家に引込ひっこんで書物などを読む事が好きなのに引き易ひかえて、兄はまた釣道楽つりどうらくに憂身うきみをやつしているのがあります。する

とこの兄が自分の弟の引込思案でただ家にばかり引籠ひきこもっているのを非常に忌いまわしいもののように考えるのです。必竟ひっきようは釣をしな
いからああいう風に厭世えんせい的になるのだと合点がてんして、むやみに弟を
釣に引張り出そうとするのです。弟はまたそれが不愉快でたまら
ないのだけれども、兄が高圧的に釣竿つりざおを担がしたり、魚籃びくを提げ
させたりして、釣堀へ随行を命ずるものだから、まあ目を瞑つむって
くつついて行って、気味の悪い鮒ふななどを釣っていやいや帰ってく
るのです。それがために兄の計画通り弟の性質が直ったかという
と、けっしてそうではない、ますますこの釣というものに対して
反抗心を起してくるようになります。つまり釣と兄の性質とはぴ

たりと合ってその間に何の隙間もないのでしようが、それはいわゆる兄の個性で、弟とはまるで交渉いっしょうがないのです。これはもとより金力の例ではありません、権力の他を威圧する説明になるのです。兄の個性が弟を圧迫あっぱくして無理に魚を釣らせるのですから。もつともある場合には、——例えば授業を受ける時とか、兵隊になった時とか、また寄宿舎でも軍隊生活を主位におくとか——すべてそう云った場合には多少この高圧的手段は免まぬかれますまい。しかし私はおもにあなたが一本立いっぽんだちになって世間へ出た時の事を云っているのだからそのつもりで聴いて下さらなくては困ります。

そこで前申した通り自分が好いと思った事、好きな事、自分と性の合う事、幸にそこにぶつかって自分の個性を発展させて行くうちには、自他の区別を忘れて、どうかあいつもおれの仲間引き摺り込んでやろうという気になる。その時権力があると前云った兄弟のような変な関係が出来上るし、また金力があると、それをふりまいて、他を自分のようなものに仕立上げようとする。すなわち金を誘惑の道具として、その誘惑の力で他を自分に氣に入るように変化させようとする。どっちにしても非常な危険が起るのです。

それで私は常からこう考えています。第一にあなたがたは自分

の個性が発展できるような場所に尻を落ちつけべく、自分とぴたりと合った仕事を発見するまで邁進まいしんしなければ一生の不幸である。しかし自分がそれだけの個性を尊重し得るように、社会から許されるならば、他人に対してもその個性を認めて、彼らの傾向けいこうを尊重するのが理の当然になって来るでしょう。それが必要でかつ正しい事としか私には見えません。自分は天性右を向いているから、あいつが左を向いているのは怪けしからんというのは不都合じゃないかと思うのです。もつとも複雑な分子の寄って出来上った善悪とか邪正じゃせいとかいう問題になると、少々込み入った解剖かいぼうの力を借りなければ何とも申されませんが、そうした問題の関係して

来ない場合もしくは関係しても面倒めんどうでない場合には、自分が他ひとから自由を享有きょうゆうしている限り、他にも同程度の自由を与えて、同等に取り扱あつかわなければならん事と信ずるよりほかに仕方がないのです。

近頃自我とか自覚とか唱えていくら自分の勝手な真似をしても構わないという符徴ふちように使うようですが、その中にははなはだ怪しいのがたくさんあります。彼らは自分の自我をあくまで尊重するような事を云いながら、他人の自我に至っては毫も認めていないのです。いやしくも公平の眼を具し正義の観念をもつ以上は、自分の幸福のために自分の個性を發展して行くと同時に、その自由

を他にも与えなければすまん事だと私は信じて疑わないのです。
我々は他が自己の幸福のために、己おのれの個性を勝手に発展するの
を、相当の理由なくして妨害ぼうがいしてはならないのであります。私は
なぜここに妨害という字を使うかというと、あなたがたは正しく
妨害し得る地位に将来立つ人が多いからです。あなたがたのうち
には権力を用い得る人があり、また金力を用い得る人がたくさん
あるからです。

元来をいうなら、義務の附着しておらない権力というものが世
の中にあるはずがないのです。私がこうやって、高い壇の上か
らあなた方を見下して、一時間なり二時間なり私の云う事を静せいじゆく肅

に聴いていただく権利を保留する以上、私の方でもあなた方を静肅にさせるだけの説を述べなければすまないはずだと思います。よし平凡^{へいほん}な講演をするにしても、私の態度なり様子なりが、あなたがたをして礼を正さしむるだけの立派さをもっていなければならんはずのものであります。ただ私はお客である、あなたがたは主人である、だからおとなしくしなくてはならない、とこう云おうとすれば云われたい事もないでしょうが、それは上面^{うわつら}の礼式にとどまる事で、精神には何の関係もない云わば因襲^{いんしゅう}といったようなものですから、てんで議論にはならないのです。別の例を挙げてみますと、あなたがたは教場で時々先生から叱られる事がある

でしょう。しかし叱りっ放しの先生がもし世の中にあるとすれば、その先生は無論授業をする資格のない人です。叱る代りには骨を折って教えてくれるにきまっています。叱る権利をもつ先生はすなわち教える義務をももっているはずなのですから。先生は規律をただすため、秩序ちつじょを保つために与えられた権利を十分に使うでしょう。その代りその権利と引き離す事のできない義務も尽つくさなければ、教師の職を勤め終おおせる訳に行きますまい。

金力についても同じ事であります。私の考かんがえによると、責任を解しない金力家は、世の中にあつてならないものなのです。その訳を一口にお話しますとこうなります。金銭というものは至極重宝

なもので、何へでも自由自在に融通が利く。たとえば今私がここで、相場をして十万円儲けたとすると、その十万円の家屋を立てる事もできるし、書籍を買う事もできるし、または花柳社界を賑わす事もできるし、つまりどんな形にでも変って行く事ができます。そのうちでも人間の精神を買う手段に使用できるのだから恐ろしいではありませんか。すなわちそれをふりまいて、人間の徳義心を買ひ占める、すなわちその人の魂を墮落させる道具とするのです。相場で儲けた金が徳義的倫理的に大きな威力をもつて働らき得るとすれば、どうしても不都合な応用と云わなければならぬかと思われまふ。思われるのですけれども、實際その通りに

金が活動する以上は致し方がない。ただ金を所有している人が、相当の徳義心をもつて、それを道義上害のないように使いこなすよりほかに、人心の腐敗ふはいを防ぐ道はなくなってしまうのです。それで私は金力には必ず責任がついて廻らなければならないといいたくなります。自分は今これだけの富の所有者であるが、それをこういう方面にこう使えば、こういう結果になるし、ああいう社会にああ用いればああいう影響えいきやうがあると吞み込むだけの見識を養成するばかりでなく、その見識に応じて、責任をもつてわが富を所置しなければ、世の中にすまないと云うのです。いな自分自身にもすむまいというのです。

今までの論旨ろんしをかい摘つまんでみると、第一に自己の個性の発展を仕遂しとげようと思うならば、同時に他人の個性も尊重しなければならぬという事。第二に自己の所有している権力を使用しようと思うならば、それに附随している義務というものを心得なければならぬという事。第三に自己の金力を示そうと願うなら、それに伴ともなう責任を重おもじなければならないという事。つまりこの三力条に歸着するのであります。

これをほかの言葉で言い直すと、いやしくも倫理的に、ある程度の修養を積んだ人でなければ、個性を發展する価値もなし、権力を使う価値もなし、また金力を使う価値もないという事になる

のです。それをもう一遍^{ぺん}云い換^かえると、この三者を自由に享^うけ楽しむためには、その三つのものの背後にあるべき人格の支配を受ける必要が起って来るということです。もし人格のないものがむやみに個性を発展しようとする、他^{ひと}を妨害する、権力を用いようとする、濫^{らん}用に流れる、金力を使おうとすれば、社会の腐敗をもたらす。ずいぶん危険な現象を呈^{てい}するに至るのです。そうしてこの三つのものは、あなたがたが将来において最も接近しやすいものであるから、あなたがたはどうしても人格のある立派な人間になっておかなくてはいけないだろうと思います。

話が少し横へそれますが、ご存じの通り英吉利^{イギリス}という国は大変

自由を尊ぶ国であります。それほど自由を愛する国でありながら、また英吉利ほど秩序の調った国はありません。実をいうと私は英吉利を好かないのです。嫌いではあるが事実だから仕方なしに申し上げます。あれほど自由でそうしてあれほど秩序の行き届いた国は恐らく世界中にないでしょう。日本などはとうてい比較にもなりません。しかし彼らはただ自由なのではありません。自分の自由を愛するとともに他の自由を尊敬するように、小供の時から社会的教育をちゃんと受けているのです。だから彼らの自由の背後にはきつと義務という観念が伴っています。 England expects every man to do his duty といった有名なネルソンの言

葉はけっして当座限りの意味のものではないのです。彼らの自由と表裏して発達して来た深い根柢こんていをもった思想に違ちがないのです。

彼らは不平があるとよく示威運動をやります。しかし政府はけっして干渉かんしょうがましい事をしません。黙って放っておくのです。

その代り示威運動をやる方でもちゃんと心得こころえていて、むやみに政府の迷惑めいわくになるような乱暴は働はたらかないのです。近頃女権拡張論者と云ったようなものがむやみに狼藉ろうぜきをするように新聞などに見えています。あれはまあ例外です。例外にしては数が多過ぎると云われればそれまでですが、どうも例外と見るよりほかに仕方がないようです。嫁よめに行かれないとか、職業が見つからないとか、

または昔しから養成された、女を尊敬するという気風につけ込むのか、何しろあれは英国人の平生の態度ではないようです。名画を破る、監獄かんごくで断食だんじきして獄丁ごくていを困らせる、議会のベンチへ身体からだを縛りしばつけておいて、わざわざ騒々そうぞうしく叫び立てる。これは意外の現象ですが、ことによると女は何をしても男の方で遠慮するから構わないという意味でやっているのかも分りません。しかしまあこういう理由にしても変則らしい気がします。一般の英国気質と
いうものは、今お話しした通り義務の観念を離れない程度において自由を愛しているようです。

それで私は何も英国を手本にするという意味ではないのですけ

れども、要するに義務心を持っていない自由は本当の自由ではないと考えます。と云うものは、そうしたわがままな自由はけつして社会に存在し得ないからであります。よし存在してもすぐ他から排斥はいせきされ踏み潰ふみつぶされるにきまっていますからです。私はあなたがたが自由にあらん事を切望するものであります。同時にあなたがたが義務というものを納得せられん事を願ってやまないのです。あります。こういう意味において、私は個人主義だと公言して憚はばからないつもりです。

この個人主義という意味に誤解があつてはいけません。ことにあなたがたのようなお若い人に対して誤解を吹き込ふこんでは私がす

みませんから、その辺はよくご注意を願っておきます。時間が
逼っているからなるべく単簡に説明致しますが、個人の自由は先
刻お話した個性の発展上極めて必要なものであつて、その個性の
発展がまたあなたがたの幸福に非常な関係を及^{およ}ぼすのだから、ど
うしても他に影響のない限り、僕は左を向く、君は右を向いても
差支ないくらいの自由は、自分でも把持^{はじ}し、他人にも附与^{ふよ}しなく
てはなるまいかと考えられます。それがとりも直さず私のいう個
人主義なのです。金力権力の点においてもその通りで、俺^{おれ}の好か
ないやつだから畳んでしまえとか、気に喰^くわない者だからやつつ
けてしまえとか、悪い事もないのに、ただそれらを濫用^{らんよう}したらど

うでしょう。人間の個性はそれで全く破壊はかいされると同時に、人間の不幸もそこから起らなければなりません。たとえば私が何も不都合を働らかないのに、単に政府に気に入らないからと云って、警視総監けいしそうかんが巡查じゆんさに私の家を取り巻かせたらどんなものでしょう。警視総監にそれだけの権力はあるかも知れないが、徳義はそういう権力の使用を彼に許さないのであります。または三井とか岩崎とかいう豪商ごうしょうが、私を嫌うというだけの意味で、私の家の召使めしつかいを買収して事ごとに私に反抗させたなら、これまたどんなものでしょう。もし彼らの金力の背後に人格というものが多少でもあるならば、彼らはけっしてそんな無法を働らく気にはなれないので

あります。

こうした弊害^{へいがい}はみな道義上の個人主義を理解し得ないから起るので、自分だけを、権力なり金力なりで、一般に推し広めようとするわがままにほかならんのであります。だから個人主義、私のここに述べる個人主義というものは、けっして俗人の考えているように国家に危険を及ぼすものでも何でもないので、他の存在を尊敬すると同時に自分の存在を尊敬するというのが私の解釈なのです。ですから、立派な主義だろうと私は考えているのです。

もっと解りやすく云えば、党派心がなくって理非がある主義なのです。朋党^{ほうとう}を結び団隊を作って、権力や金力のために盲動^{もうどう}しな

いという事なのです。それだからその裏面には人に知られない淋^{さび}しさも潜んでいるのです。すでに党派でない以上、我は我の行くべき道を勝手に行くだけで、そうしてこれと同時に、他人の行くべき道を妨げないのだから、ある時ある場合には人間がばらばらにならなければなりません。そこが淋しいのです。私がかつて朝日新聞の文芸欄^{ぶんげいらん}を担任していた頃、だれであつたか、三宅雪嶺^{みやけせつれい}さんの悪口を書いた事がありました。もちろん人身攻撃ではないので、ただ批評に過ぎないのです。しかもそれがたった二三行あつたのです。出たのはいつごろでしたか、私は担任者であつたけれども病気をしたからあるいはその病氣中かも知れず、または病氣

中でなくって、私が出して好いと認定したのかも知れません。とにかくその批評が朝日の文芸欄に載ったのです。すると「日本及び日本人」の連中が怒りました。私の所へ直接にはかけ合わなかったけれども、当時私の下働きをしていた男に取消とりけしを申し込んできました。それが本人からではないのです。雪嶺さんの子分——子分ばくちうちというと何だか博奕打のようでおかしいが、——まあ同人といったようなものでしょう、どうしても取り消せというのです。それが事実の問題ならもつともですけれども、批評なんだから仕方がないじゃありませんか。私の方ではこちらの自由だというよりほかに途はないのです。しかもそうした取消を申し込んだ

「日本及び日本人」の一部では毎号私の悪口を書いている人があ
るのだからなおのこと人を驚ろかせるのです。私は直接談判はし
ませんでしたけれども、その話を間接に聞いた時、変な心持こころもちがし
ました。というのは、私の方は個人主義でやっているのに反し
て、向うは党派主義で活動しているらしく思われたからです。当
時私は私の作物をわるく評したもののさえ、自分の担任している文
芸欄へ載せたくらいですから、彼らのいわゆる同人なるものが、
一度に雪嶺さんに対する評語が気に入らないと云って怒ったの
を、驚ろきもしたし、また変にも感じました。失礼ながら時代後
れだとも思いました。封建時代ほうけんの人間の団隊のようにも考えまし

た。しかしそう考えた私はついに一種の淋しさを脱却する訳に行
かなかったのです。私は意見の相違はいかに親しい間柄あいだからでもどう
する事もできないと思っていましたから、私の家に入出入りをする
若い人達に助言はしても、その人々の意見の発表に抑圧よくあつを加える
ような事は、他に重大な理由のない限り、けっしてやった事がな
いのです。私は他の存在ひとをそれほど認めている、すなわち他に
それだけの自由を与えているのです。だから向うの気が進まない
のに、いくら私が汚辱を感じずような事があっても、けっして助
力は頼めないのです。そこが個人主義の淋しさです。個人主義は
人を目標として向背こうはいを決する前に、まず理非を明らかに、去就を

定めるのだから、ある場合にはたった一人ぼっちになって、淋しい心持がするのです。それはそのはずです。榎まきざつぼう雑木でも束たばになつていれば心丈夫こころじやうぶですから。

それからもう一つ誤解を防ぐために一言しておきたいのですが、何だか個人主義というところと国家主義の反対で、それを打ち壊すように取られますが、そんな理窟りくつの立たない漫然まんぜんとしたものではないのです。いったい何々主義という事は私のあまり好まないところで、人間がそう一つ主義に片づけられるものではないとは思いますが、説明のためですから、ここにはやむをえず、主義という文字の下にいろいろの事を申し上げます。ある人

は今の日本はどうしても国家主義でなければ立ち行かないように云いふらしまたそう考えています。しかも個人主義なるものを蹂躪しゅうりつしなければ国家が亡ほろびるような事を唱道するものも少なくはありません。けれどもそんな馬鹿気たはずはけっしてありようがないのです。事実私共は国家主義でもあり、世界主義でもあり、同時にまた個人主義でもあるのであります。

個人の幸福の基礎きそとなるべき個人主義は個人の自由がその内容になっているには相違ありませんが、各人の享有きやうゆうするその自由というものは国家の安危に従って、寒暖計のように上ったり下ったりするのです。これは理論というよりもむしろ事実から出る理論

と云った方が好いかも知れませんが、つまり自然の状態がそうなつて来るのです。国家が危くなれば個人の自由が狭められ、国家が泰平たいへいの時には個人の自由が膨脹ぼうちやうして来る、それが当然の話です。いやしくも人格のある以上、それを踏み違えて、国家の亡びるか亡びないかという場合に、疴違かんちがいをしてただむやみに個性の發展ばかりめがけている人はいはずです。私のいう個人主義のうちには、火事が済んでもまだ火事頭巾ずきんが必要だと云って、用もないのに窮屈きうくつがる人に対する忠告も含まれていると考えて下さい。また例になります、昔し私が高等学校にいた時分、ある会を創設したものがありません。その名も主意も詳しい事くわは忘れてしまい

ましたが、何しろそれは国家主義を標榜ひょうぼうしたやかましい会でした。もちろん悪い会でもありません。当時の校長の木下広次さんなどは大分肩を入れていた様子でした。その会員はみんな胸にめだるめだるを下げていました。私はめだるめだるだけはご免蒙めんこうむりましたが、それでも会員にはされたのです。無論発起人でないから、ずいぶん異存もあったのですが、まあ入っても差支なからうという主意から入会しました。ところがその発会式が広い講堂で行なわれた時に、何かの機はずみでしたらう、一人の会員が壇上に立って演説めいた事をやりました。ところが会員ではあったけれども私の意見には大分反対のところもあったので、私はその前ずいぶんその

会の主意を攻撃していたように記憶しています。しかるにいよいよ発会式となつて、今申した男の演説を聴いてみると、全く私の説の反駁^{はんぱく}に過ぎないのです。故意だか偶然だか解りませんが、勢い私はそれに対して答弁の必要が出て来ました。私は仕方なしに、その人のあとから演壇に上りました。当時の私の態度なり行儀なりははなはだ見苦しいものだと思いますが、それでも簡潔に云う事だけは云つて退^のけました。ではその時何と云つたかとお尋ねになるかも知れませんが、それはすこぶる簡単なのです。私はこう云いました。——国家は大切かも知れないが、そう朝から晩まで国家国家と云つてあたかも国家に取りつかれたような真似

はとうてい我々にできる話でない。常住坐臥じょうじゅうざが国家の事以外を考え
てならないという人はあるかも知れないが、そう間断なく一つ事
を考えている人は事実あり得ない。豆腐屋とうふが豆腐を売ってあるく
のは、けっして国家のために売って歩くのではない。根本的主
意は自分の衣食の料を得るためである。しかし当人はどうあろう
ともその結果は社会に必要なものを供するという点において、間
接に国家の利益になっているかも知れない。これと同じ事で、今
日の午ひるに私は飯を三杯はい食べた、晩にはそれを四杯に殖ふやしたとい
うのも必ずしも国家のために増減したのではない。正直に云えば
胃の具合できめたのである。しかしこれらも間接のまた間接に云

えば天下に影響しないとは限らない、否観方みかたによっては世界の
勢に幾分いくぶんか関係してないとも限らない。しかしながら肝心かんじんの当
人はそんな事を考えて、国家のために飯を食わせられたり、国家
のために顔を洗わせられたり、また国家のために便所に行かせら
れたりしては大変である。国家主義を奨励しょうれいするのはいくらしても
差支ないが、事実できない事をあたかも国家のためにするごとく
に装よそおうのは偽りである。——私の答弁はざっとこんなものであり
ました。

いったい国家というものが危くなれば誰だって国家の安否を考
えないものは一人もない。国が強く戦争の憂うれいが少なく、そうして

他から犯される憂がなければならぬほど、国家的觀念は少なくなつてしかるべき訳で、その空虚を充たすために個人主義が這入ってくるのは理の当然と申すよりほかに仕方がないのです。今の日本はそれほど安泰でもないでしょう。貧乏である上に、国が小さい。したがっていつどんな事が起つてくるかも知れない。そういう意味から見て吾々は國家の事を考えていなければならぬのです。けれどもその日本が今が今潰れるとか滅亡めつぼうの憂目にあうとかいう国柄でない以上は、そう國家國家と騒ぎ廻る必要はないはずです。火事の起らない先に火事装束しやうそくをつけて窮屈きうくつな思いをしながら、町内中駈かけ歩くのと一般であります。必竟ひじやうずるにこういう事

は實際程度問題で、いよいよ戦争が起った時とか、危急存亡の場
合とかになれば、考えられる頭の人、——考えなくてはならな
い人格の修養の積んだ人は、自然そちらへ向いて行く訳で、個人
の自由を束縛^{そくばく}し個人の活動を切りつめても、国家のために尽すよ
うになるのは天然自然と云っていいくらいなものです。だからこ
の二つの主義はいつでも矛盾して、いつでも撲殺^{ぼくさつ}し合うなどとい
うような厄介なものでは万々ないと私は信じているのです。この
点についても、もっと詳しく申し上げたいのですけれども時間が
ないからこのくらいにして切り上げておきます。ただもう一つご
注意までに申し上げておきたいのは、国家的道德というものは個

人的道德に比べると、ずっと段の低いもののように見える事です。元来国と国とは辞令はいくらやかましくつても、徳義心はそんなにありやしません。詐欺さぎをやる、ごまかしをやる、ペテンにかける、めちやくちなものであります。だから国家を標準とする以上、国家を一団と見る以上、よほど低級な道德に甘んあまじて平気でいなければならぬのに、個人主義の基礎から考えると、それが大変高くなつて来るのですから考えなければなりません。だから国家の平穩へいおんな時には、徳義心の高い個人主義にやはり重きをおく方が、私にはどうしても当然のように思われます。その辺は時間がないから今日はそれより以上申上げる訳に参りません。

私はせっかくのご招待だから今日まかり出て、できるだけ個人の生涯を送らるべきあなたがたに個人主義の必要を説きました。これはあなたがたが世の中へ出られた後、幾分かご参考になるだろうと思うからであります。はたして私のいう事が、あなた方に通じたかどうか、私には分りませんが、もし私の意味に不明のところがあるとするば、それは私の言い方が足りないか、または悪いかだろうと思います。で私の云うところに、もし曖昧あいまいの点があるなら、好い加減にきめないで、私の宅までおいで下さい。できるだけはいつでも説明するつもりでありますから。またそうした手数を尽さないでも、私の本意が充分じゅうぶんご会得になったなら、私の

満足はこれに越した事はありません。あまり時間が長くなりますからこれでご免を蒙ります。

「一冊堂・青空文庫」について

「一冊堂・青空文庫」は、青空文庫を紙の書籍で読むことができるよう、公開されているデータを pdf 形式に変換して、無料で配信させていただいております。変換に際して、旧仮名使い、ルビ等がうまく変換されない場合があります。できるだけ修正するようにしておりますが、お気付きの場合、ご連絡をいただければ、早急に修正データをアップロードいたします。ご協力いただきますようお願い申し上げます。

青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp>) は、著作権の消滅した作品や「自由に読んでもらってかまわない」とされたものを、テキストと XHTML（一部は HTML）形式で公開しているインターネット電子図書館です。青空文庫は、そのサイト運営も含め、電子データの作成や校正作業などはボランティアの皆さんの活動によって支えられています。



一冊堂・青空文庫 pdf データ

2016 年 3 月 15 日 第一期製作

原 稿 青空文庫

発行者 佐藤 聖

発行所 一冊堂

〒165-0025
東京都中野区沼袋 2-32-5 幸荘 C 室
mail : issatudo@gmail.com
